



コクヨの防災 BCPとしての備蓄を考える

9月1日は、災害についての認識を深め、地震や台風、豪雨などへの準備をする「防災の日」です。

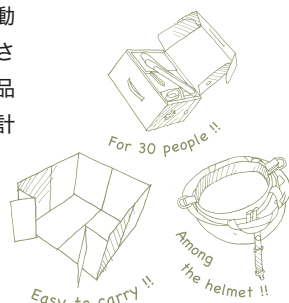
企業防災においては、地震などによる災害被害を最小化する「減災」と、災害時の企業活動の維持または早期回復を目指す「事業継続」とは密接に関わり合っており双方ともに推進すべきと言われています。

企業の防災担当者は、いつ来るか分からない災害のために様々な準備を必要とされている中、実際に有事が起きてしまったときに備えて、どのような点にポイントを置いて準備すればよいのでしょうか。

今回はコクヨが考える防災備蓄についてご紹介します。

何のための備蓄か？

私達はオフィス向けの防災ソリューションを提供するサプライヤとして、このテーマに直面することがよくあります。例えばクライアントである企業の担当者から「水を100ケース欲しい」とのオファーを頂いた際の話です。最も単純な回答は「水100ケースの見積を提示し、納品の段取りを打合せすること」ですが、それでは足りないと考えます。東日本大震災から5年が経ち、多くの企業では備蓄品の更新時期を迎えています。しかしながら、「当時の担当者がなぜこの備蓄品を購入したかが分からない」、「なぜこの数量を備蓄しているかが分からない」、「分からないから同じものを同じ数だけ購入する」といった状態に陥っているケースが少なくないからです。そもそも備蓄品を購入することは有用な「手段」ではありますが、本質的な「目的」ではありません。では私達企業は何のためにそれらの備蓄品に多大なコストをかけ、備蓄をするのでしょうか？それはやはり、災害によって企業活動を停止させない、或いはより早期に復旧させるためです。とすると、備蓄は単純な物品の購入ではなく、まさにBCP(事業継続計画)の一部と言えるのではないのでしょうか。



BCPと備蓄

しかしながらBCPと聞くと、「経営者レベルの課題」、「中小企業には難しい大きなテーマ」、「リスクコンサルティング会社の専門領域」というイメージをお持ちの方も多いかと思いますが。もちろんそれもBCPですが、ルール設計や被害想定を行うだけでは、BCPは成り立ちません。やはり具体的な手段としての備蓄は必要不可欠なのです。だからと言って、沢山備蓄をしましょうということでは決してありません。ここで大切なことは、BCPと備蓄がしっかりと繋がっているかどうかということです。では、繋がっているとはどういうことか。一度、BCPとしての備蓄を考えてみましょう。

例) 自社にとってのワーストケースの一つとして、従業員の負傷を想定する。

- ➡ 従業員の負傷リスク軽減の手段の一つとして、発災後の混乱や情報錯綜状態での帰宅抑止を検討する。
- ➡ 帰宅抑止の具体的な期間として、3日間(内閣府帰宅困難者ガイドラインより準拠)を想定する。
- ➡ その期間に必要な物資として、何々の備蓄を実施する。

如何でしょうか。貴社の備蓄もBCPと本当に繋がるものかどうか、是非とも試してみてください。必ず新たな発見があると思います。少し極端な話ではありますが、BCPと繋がらない備蓄にはリスクさえあります。過去にこのような事例がありました。とあるクライアントから「帰宅支援セットを従業員に配布したい」、「その中には3リットルの水をセットしたい」というオファーを頂きました。当時その企業では20km圏内在住の従業員には徒歩帰宅を認めていました。ということは20kmもの道のり(被災状況によってはもっと長距離)をこの3リットルの水が入った約5キロのリュックと自分の手荷物を持って歩くということです。もちろんそういったセットを作ることや、その内容物自体を否定するものではありません。伝えたいことは、何のために(ここでは従業員を無事に自宅まで帰す)という本質的な目的を、モノを選定する作業の中で見失わないように注意しなければならないということです。

さらにこのようなケースもありました。「倉庫の中に利用目的の分からない備蓄品が沢山あり、捨ててしまうかどうか悩んでいる」。いくら綿密に備蓄計画を設計したとしても、後任者に受け継がれていなければ、それがムダになってしまうことも有り得るのです。つまり、「何のために」を考えるだけでなく、それを記録しておくことはとても重要です。今、お手元にある備蓄品リストに品名と数量、そして使用期限の記載しかないようであれば、黄色信号かも知れません。

東日本大震災から5年目を迎え、不幸なことに新たな地震災害までもが起きてしまった今年。せっかくの備蓄が万が一のリスクやムダになってしまわないように、今ある備蓄品をもう一度見直してみても如何でしょうか？本当に使うことになる日が来る前に、それが何のために備蓄されているかを知る。これが、BCPとしての備蓄ではないかと私達は考えています。



コクヨ株式会社 事業開発センター
防災ソリューション事業部
防災プランナー

酒井希望

貴方の
オフィスは
大丈夫？

適切な防災備蓄の

✓チェックリスト



① 時系列に応じた備蓄品の選定

初動対応

～1日

- ☐ 救助用品(救助笛、バール等)
- ☐ 避難用品(ヘルメット等)
- ☐ 救急用品
- ☐ ライト(懐中電灯・ランタン等)
- ☐ ラジオ
- ☐ 対策本部用品
(発電機、
トランシーバー等)

❗ 初動対応で必要となる緊急性の高いものは、従業員がいる全てのフロアに配置されていることが望ましい



滞留生活

～3日

- ☐ 食料
- ☐ トイレ用品
- ☐ 保存水
- ☐ 毛布・防寒具
- ❗ 『従業員数(+来訪者数)×3日分(以上)の備蓄数が望ましい』
- ☐ 避難所用品(間仕切り、調理器具等)



帰宅支援

～10日

- ☐ 個人配布セット
(軍手、懐中電灯、
持運び用バック等)



備蓄選定をするためのポイント

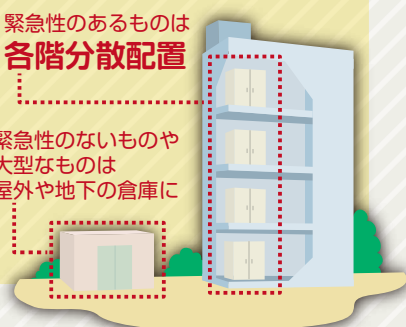
災害発生直後に必要な救助用品、初動対応が落ち着いた滞留生活をするようになった際に必要な保存水等、必要になる備蓄品は変わってきます。時系列に応じ、備蓄品の抜けやモレがないかをチェックしましょう。

保管場所のポイント

災害が起きたときにその場ですぐに必要なものや、ある程度落ち着いてから使用するものがあります。その用途にあった収納場所が重要となります。

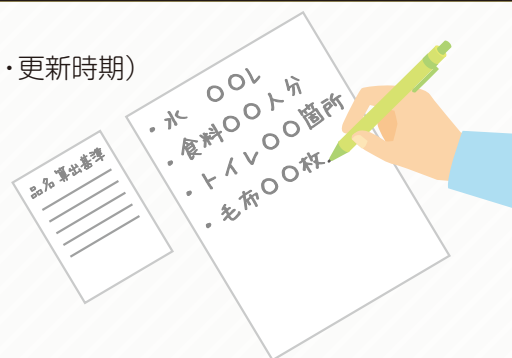
緊急性のあるものは
各階分散配置

緊急性のないものや
大型なものは
屋外や地下の倉庫に



② 管理・運用方法の確認

- ☐ 管理者が備蓄品の管理運用に関する情報を把握し、記録している
(品目・数量・選定基準・購入時期・購入元・備蓄場所・賞味期限・使用期限・更新時期)
- ☐ 定期的に備蓄品の品目や数量の見直しを行っている
- ☐ 備蓄品の保管場所や使い方を従業員全員が把握している
- ☐ 備蓄品の配布体制が整っている
- ☐ 備蓄品は目に付きやすく取出しやすい場所に保管されている
- ☐ 使用場所までの運搬手段が確保されている
- ☐ 使用した備蓄品を補充する体制が整っている



管理・運用のポイント

実際の使用を想定し、体制や役割を明確にしておきましょう。備蓄品の情報を明確にすることで、管理者の負担が軽減されます。

備蓄品など防災用品は、
コクヨ防災カタログ『ソナエル』
で詳しくご紹介！

